

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18300222
 研究課題名（和文）ライフスキル形成を基礎とする薬物乱用防止教育の長期的効果に関する大規模評価研究
 研究課題名（英文）Large-scale Study on the Long-term Effectiveness of Drug Abuse Prevention Education Focusing on Life Skills Development
 研究代表者
 川畑 徹朗 (KAWABATA TETSURO)
 神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・教授
 研究者番号：50134416

研究成果の概要（和文）：

中学生の喫煙，飲酒，薬物乱用を防止することを目的として開発した，ライフスキル形成を基礎とするプログラムの有効性を評価するための3年間の縦断研究を実施した。プログラムは特に女子に対して効果があり，中学校3年時の最終事後調査の結果によれば，プログラム実施校の女子は，非実施校の女子に比べて，セルフエスティーム，社会的スキル，ストレス対処スキル，友だちからの喫煙や薬物の勧めを断ることができるという自己効力感が高かった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this three-year longitudinal study was to test the effectiveness of a health education program focusing on life skills development to prevent cigarette smoking, alcohol drinking and use of illegal drugs among Japanese junior high school students. According to the results of the last posttest conducted in the 3rd grade, the program was especially effective for girls, showing that the intervention group had higher scores on self-esteem, social skills, coping skills and self-efficacy of refusing peer pressures to smoke or use illegal drugs than the comparison group.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,000,000	1,200,000	4,000,000
2007年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 応用健康科学

キーワード：喫煙・薬物乱用防止教育，ライフスキル教育

1. 研究開始当初の背景

欧米では1970年代に青少年の危険行動とりわけ喫煙，飲酒，薬物乱用の形成要因に関する研究が進み，危険行動を起こす青少年に共通する特徴として，セルフエスティ

ーム，ストレス対処，社会的スキルなどのライフスキルの問題が存在することが確認された。そして1980年代になってライフスキル形成を中心的要素とする健康教育プログラムが開発され，青少年の危険行動を防

止する上で大きな効果をあげた。

我が国においては、研究代表者らを中心とした研究グループが1990年代後半から青少年の危険行動とライフスキルとの関係に関する研究を行い、とりわけセルフエスティームの低い青少年が喫煙、飲酒、薬物乱用をしやすいことを明らかにし、我が国の青少年の危険行動を防止する上でライフスキル形成を中心的要素とする健康教育プログラムを開発し、普及することの理論的根拠を示した。

以上のような研究成果を基に、我が国においてもライフスキル教育を取り入れた喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導手引書が開発され、研究代表者らはその中心的役割を担ってきた。しかし、これまでに開発した指導手引書は、あくまで体育科（保健体育科）を中心とする指導の中で部分的にライフスキル教育を取り入れているに過ぎず、より包括的な喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの開発が求められている。また、その有効性に関する評価研究もほとんど行われてこなかった。そこで研究代表者らは、平成15～18年度文部科学省科学研究費補助金「ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの短期的評価」（研究代表者：川畑徹朗）を受けてプログラム開発と評価研究に取り組み、中学校1年生用のプログラムが生徒のセルフエスティームを始めとするライフスキルを向上させ、喫煙、飲酒、薬物乱用に対する態度に好ましい影響を与えることを明らかにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国内外の研究によって、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用などの危険行動の形成と密接な関係があることが知られているライフスキルに焦点を当てたプログラムの中学生版を開発し、その長期的効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 対象

新潟県村上市の中学校2校と胎内市の中学校2校の1年生335人を研究対象とし、準実験計画法に則り、各地域の1校をプログラム実施校（介入校）、もう1校を比較校とした。ただし、胎内市の介入校においては、介入校の事情によって2年目以降はプログラムがほとんど実施できなかったために、分析からは除外し、3校の1年生278人（男子143人、女子135人）を分析対象とした。

(2) 使用したライフスキル教育プログラム

本研究においては、ライフスキル教育もしくは健康教育を専門とする大学研究者と、学校現場において長年にわたってライフスキ

ル形成を基礎とする健康教育や生徒指導に携わってきた校長、教育委員会指導主事、一般教諭、養護教諭などの実践者から構成される研究プロジェクトを組織し、プログラムの開発作業を進めた。

プログラムを開発する際の基本的考え方は、思春期の様々な危険行動の共通要因であることが国内外の研究で確認されているセルフエスティームの形成を促すことによって、メディアや友人などの社会的要因による好ましくない影響を受けにくくすることを目指すものである。具体的には、セルフエスティームの構成要素であると考えられる「個性の感覚」、「有能性の感覚」、「絆の感覚」を育てることに焦点を当て、正確な自己概念を持つこと、意志決定スキル、目標設定スキル、ストレス対処スキル、社会的スキル（対人関係スキル）に関する学習活動を考案した。また、課外活動として、学校内や地域におけるボランティア活動を取り入れることとした。そのねらいは、ボランティア活動を通して、教室で学習したライフスキルを強化したり、お互いの能力や価値を認め合ったりすることによって、セルフエスティームを高めることにある。

開発したプログラムは、中学校1年20時間、2年14時間、3年16時間で構成される。

(3) プログラムの有効性の評価

2007年4月から5月にかけて無記名の自記入式質問紙調査（事前調査）を実施した。主な質問項目は、セルフエスティーム（「友人」、「家族」、「全般」）、社会的スキル（「向社会的スキル」、「引っ込み思案行動」、「攻撃行動」）、ストレス対処スキル（「サポート希求」、「問題解決」、「気分転換」、「情動的回避」、「行動的回避」、「認知的回避」）、意志決定スキル、目標設定スキル、喫煙、飲酒、薬物乱用に関する態度及び行動であった。なお、回答内容の秘密の保持のために、記入後の調査票は、あらかじめ各人に配付した封筒に入れ、封をさせた。

なお、無記名調査でありながらもデータの縦断的解析を可能とするために以下の手続きをとった。

調査票への記入に先立って、6桁の同一のID番号を書いた4枚のタックシールが入った小封筒を各生徒に1封筒ずつ無作為に配付し、調査票の所定の欄にシールを1枚貼った後、残りのシールを封筒に封入し、封筒の表に自分の氏名を記入するように指示し、氏名を記入した後にシール入り封筒を回収した。なお、タックシールに記入したID番号は封筒ごとに異なっているため、個人の追跡が可能となる。第2回以降の調査では、各生徒に小封筒を再配布し、事前調査と同一ID番号のシールを調査票に貼付させた。その後の手続きは事前調査とほぼ同様である。

事前調査後、介入校の生徒に対しては、開発したプログラムを年間にわたって実施した。

各年度の終わりには、事前調査とほぼ同一内容の事後調査を実施した（計3回）。

(4) 解析方法

解析は男女別に行い、平均値の差の検定には分散分析を、2値をとる比率の差の検定には χ^2 検定を、順序尺度の分布の差の検定にはKruskal-Wallis検定を用いた。

解析に際しては、Windows用統計プログラムパッケージSPSSを使用し、統計上の有意水準は5%とした。

4. 研究成果

(1) 予備的分析

事前調査の結果によれば、幾つかの項目において介入校と比較校の生徒の間には差が認められた。

セルフエスティーム「友人」と「全般」に関しては男女ともに有意差が認められ、介入校の生徒の得点は比較校の生徒の得点に比べて高かった。

社会的スキル尺度のうち「攻撃行動」に関しては女子において有意差が認められ、介入校女子の得点は比較校女子の得点に比べて低かった。

ストレス対処スキル尺度のうち、「行動的回避」については男子において有意差が認められた。介入校男子の得点は、比較校2校の男子の得点の中間にあった。「認知的回避」については女子において有意差が認められた。介入校女子の得点は、比較校2校の女子の得点の中間にあった。

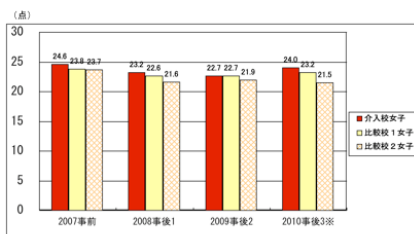
飲酒経験者率、月飲酒者率（ここ1か月間に1回以上飲酒をした者の割合）については、男子において有意差が認められ、介入校男子の飲酒経験者率及び月飲酒者率は、比較校男子の飲酒経験者率及び月飲酒者率に比べて高かった。また、20歳時の飲酒行動の予測と友だちからの飲酒の勧めを断る自信についても男子においては有意差が認められ、介入校の男子は比較校の男子に比べて、20歳時に飲酒をしていると予想する者の割合や、友だちからの飲酒の勧めを断れないと思う者の割合が高かった。

(2) プログラムの効果

①セルフエスティーム

事後調査3（3年時）の結果によれば、男子においては3校間に有意な差は認められなかった。一方女子においては、「家族」と

「家族」に関するセルフエスティーム尺度の得点 (中学生女子)



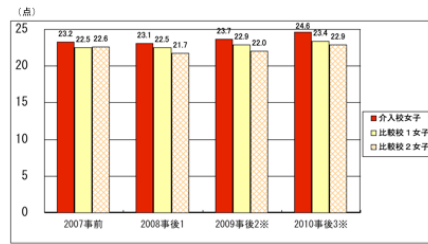
※：5%水準で学校間に有意な差があることを示す

「全般」に関して統計的に有意差が認められ、介入校女子の得点は比較校女子の得点に比べて高かった。

②社会的スキル

事後調査3の結果によれば、男子においては3校間に有意な差は認められなかった。一方女子においては、「向社会的スキル」と「攻撃行動」に関して統計的に有意差が認められ、介入校女子の得点は比較校女子の得点に比べて、「向社会的スキル」の得点は高く、「攻撃行動」の得点は低かった。

「向社会的スキル」尺度の得点 (中学生女子)



※：5%水準で学校間に有意な差があることを示す

③ストレス対処スキル

事後調査3の結果によれば、男子においては3校間に有意な差は認められなかった。一方女子においては、「問題解決」と「行動的回避」において統計的に有意差が認められ、介入校女子の得点は比較校女子の得点に比べて、「問題解決」の得点は高かった。一方「行動的回避」に関しては一定の傾向は認められなかった。

④意志決定スキル

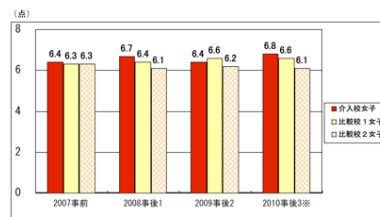
事後調査3の結果によれば、男女ともに3校間に有意な差は認められなかった。

⑤目標設定スキル

事後調査3の結果によれば、男女ともに3校間に有意な差は認められなかった。

⑥メディアリテラシー

「問題解決」尺度の得点 (中学生女子)



※：5%水準で学校間に有意な差があることを示す

事後調査3の結果によれば、男女ともに3

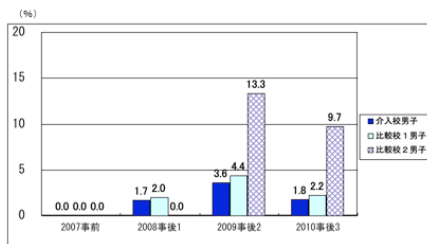
校間に有意な差は認められなかった。

ただし女子においては、介入校の生徒の得点が比較校の生徒に比べて高い傾向にあった (p=.071)。

⑦喫煙に関する行動や態度

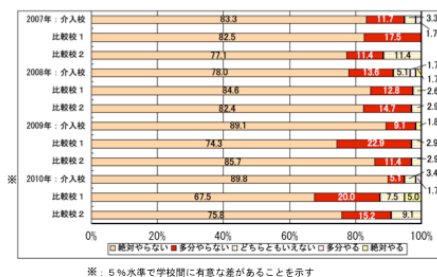
事後調査3の時点における月喫煙者率(ここ1か月間に1本以上たばこを吸った者の割合)は、男子においては介入校の生徒の割合は低かったものの統計的には有意ではなかった。女子はいずれの学校の生徒の月喫煙者率も0%であった。

月喫煙者率
(中学生男子)



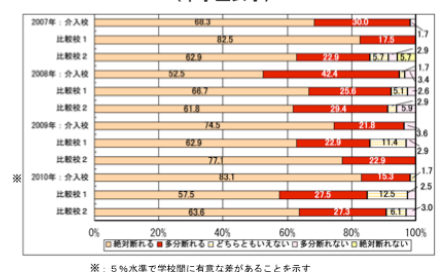
20歳時の喫煙行動の予測に関しては、事後調査3の時点においては、男女ともに有意差が認められ、介入校の女子は比較校の女子に比べて「絶対に吸わないと思う」と回答した者の割合が多かった。一方男子においては、介入校の男子における「絶対に吸わないと思う」と回答した者の割合は、比較校2校の中間であった。

20歳になるまでの喫煙行動の予測
(中学生女子)



友だちからの喫煙の勧めを断る自信に関しては、事後調査3の時点においては、女子においてのみ有意差が認められ、介入校の女

友だちのたばこのすすめを断る自信
(中学生女子)



子は比較校の女子に比べて「絶対に断れると思う」と回答した割合が多かった。

たばこの広告を分析する自信に関しては、男女ともに有意な差は認められなかった。

⑧飲酒に関する行動や態度

事後調査3の時点における月飲酒者率は、男女ともに3校間に有意差は認められなかった。また、20歳時の飲酒行動の予測、友だちからの飲酒の勧めを断る自信、酒類の広告を分析する自信に関しても、事後調査3の時点において3校間に有意差は認められなかった。

⑨薬物乱用に関する行動や態度

薬物乱用経験者は、学校や男女の別を問わずほとんどいなかったために、有意差は認められなかった。

薬物使用の意思、薬物乱用に対する態度に関しては男女ともに3校間に差は認められなかった。

友だちからの薬物の勧めを断る自信に関しては、事後調査3の時点においては、女子においてのみ有意差が認められ、介入校の女子は比較校の女子に比べて「絶対に断れると思う」と回答した割合が多かった。

薬物のすすめを断る自信
(中学生女子)



※: 5%水準で学校間に有意な差があることを示す

(3) 結論

介入校の女子は比較校の女子に比べて、事後調査3の時点において、セルフエスティーム(「家族」,「全般」), 向社会的スキル, ストレス対処スキル(「問題解決」)の得点が高く、20歳時において自分が喫煙していないと思う予測、友だちからの喫煙や薬物の勧めを断る自信が高いことが示された。セルフエスティーム「全般」を除いて、こうした差は事前調査の時点では認められず、プログラムの有効性を示すものと考えられる。

中学校3年時点では、女子の喫煙や薬物乱用はほとんど顕在化していないために、本プログラムが行動に及ぼす影響は明確には示されなかったが、喫煙者率が上昇することが予想される高校生期には行動面での効果が期待される。

男子においては、女子ほどプログラムの効果は顕著ではなかった。ただし、事前調査の時点では、介入校の男子は比較校の男子に比べて、飲酒経験者率及び月飲酒者率が高く、20歳時に飲酒をしていると予想する者の割合や、友だちからの飲酒の勧めを断れないと思う者の割合が高かったものの、事後調査3の時点ではそうした差は小さくなり、有意な差は認められなかった。

プログラムの効果が、男子においては女子ほど顕著に認められなかったことについては、今後、形成的評価を詳細に行ったり、調査対象を変えて介入研究を行ったりすることによって、さらに検討することとしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) Tetsuro Kawabata, The Rationale for Life Skills-based Health Education, The First Asia-Pacific International Conference on Health Promoting School, 2006, 227-238 (査読なし)
- (2) Tetsuro Kawabata, The Challenge of Asahi Junior High School- for the Development of Students with Healthy Self-esteem, The First Asia-Pacific International Conference on Health Promoting School, 2006, 381-391 (査読なし)
- (3) 今出友紀子, 川畑徹朗, 石川哲也, 他, 思春期の子どもたちの喫煙開始に関わる要因, 学校保健研究, 2007, 49, 170-179 (査読あり)
- (4) 川畑徹朗, 青少年の危険行動防止とライフスキル教育, 学校保健研究, 2009, 51, 3-8 (査読なし)

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 川畑徹朗, 日本におけるライフスキル形成に基礎を置く健康教育の理論

と実際. 第55回日本学校保健学会, 2008年11月15日, 名古屋

- (2) 川畑徹朗, 青少年の危険行動を防止するために-セルフエスティームの形成に焦点を当てて-. 第56回日本学校保健学会, 2009年11月28日, 那覇

〔図書〕(計4件)

- (1) JKYBライフスキル教育研究会(代表 川畑徹朗)編著, 東山書房, 「しなやかに生きる心の能力」を育てるJKYBライフスキル教育プログラム 小学校6年生用, 2010, 167ページ
- (2) JKYBライフスキル教育研究会(代表 川畑徹朗)編著, 東山書房, 「きずなを強める心の能力」を育てるJKYBライフスキル教育プログラム 小学校5年生用, 2008, 150ページ
- (3) JKYB研究会(代表 川畑徹朗)編著, 東山書房, 「未来を開く心の能力」を育てるJKYBライフスキル教育プログラム 中学生用 レベル3, 2007, 137ページ
- (4) JKYB研究会(代表 川畑徹朗)編著, 東山書房, 「実践につながる心の能力」を育てるJKYBライフスキル教育プログラム 中学生用 レベル2, 2006, 149ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川畑 徹朗 (KAWABATA TETSURO)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授
研究者番号: 50134416

(2) 研究分担者

石川 哲也 (ISHIKAWA TETSUYA)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授
研究者番号: 60082989

中村 晴信 (NAKAMURA HARUNOBU)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号: 10322140